浄土三経往生文類の研究(続)

巌城孝憲

序

大経往生，すなわち，難思議往生は，ひとえに如来回向によることが明かされ，「この世」において，現生不退，すなわち，現生正定聚こそ，如来回向によって開かれた場であることが示され，『浄土三経往生文類』は，極めて簡潔な小論ながら，広本には，往還二回向を難思議往生の骨格にして，『教行信証』から肝要の経文釈文を選び，関東の門弟たちのために，行・信・証を簡潔に宗祖は説き示されていた。今回，引き続き，先の拙論と同様に，宗祖の晩年の，いわゆる仮名法語を比較対照してこの論を読みすすめ，難解な『教行信証』を明らかにしたいと念願しつつ，考察を進めていきたい。凡夫救済の自覚道を明らかにされた普遍の書『教行信証』と，関東の門弟たちに，懇切丁寧に説き示された仮名法語類とでは，教義のレベルに数段の差があると言われることがあるにしても，『教行信証』から生まれた法語が，等流果としての位置にあることは論をまたないことと思われる。承前として，先の問題を継続して，真実証のところから始めたいが，証は往相の果であると同時に，還相の因となる。この『浄土三経往生文類』には，「如来の二種の回向によりて，真実の信楽をうる人は，かならず正定聚のくらゐに住するがゆへに，他力とまふすなり」[註1] という明解な宗祖の往還二回向論の帰結が示されているのが非常に感銘深いことである。

その前に，「難思議往生」の語義を，ここで明らかにしておきたい。三往生の名称の典拠についは，宗祖が，『愚禿鈔』において明かされている。

> 『法事讃』に三往生あり。一つに難思議往生は大経の宗なり。二つに双樹林下往生は観経の宗なり。三つに難思往生は弥陀経の宗なり。[註2]

善導大師の『法事讃』に典拠があると述べておられる。しかしながら，善導大師は，その三往生について，名を列挙するのみであり，周知のごとく，他には語られている記述が見当たらないのであるが，宗祖は，『教行信証』「化身土巻」に置かれている有名な三願転入の文において，

> ここをもって，愚禿釈の鸞，論主の解義を仰ぎ，宗師の勧化に依って，久しく万行・諸善の仮門出でて，永く双樹林下往生を離る。善本徳本の真門に回入して，偏へに難思往生の心を発しき。しかるに今，特に，方便の真門を出でて，選択の願海に転入せり。速かに難思往生の心を離れて，難思議往生を遂げんと思う。果遂の誓い，良に由あるかな。[註3]

と述べておられることから，三往生の意味は明瞭である。難思議往生は，『論註』下巻の観察門において，「不可思議なり」という言葉によって各荘厳功徳が貫かれているように，あるいは，「不可称不可説不可思議なり」という言葉によって，他力回向の真実が示されるように，「雑行を捨てて本願に帰す」という第18願の往生であり，はからいを離れた願力自然の相を表わしている往生である。双樹林下往生は，名称が示す通り，沙羅双樹のもとで般涅槃された釈尊を理想とし，釈尊の如くありたいと念願して，自らの菩提心の上に，自己の仏道を成就しようとし，他力回向にふれることなく，自力としての行によって，往生を遂げようとする。観経による往生であり，大経では第19願による往生である。難思往生は阿弥陀経による往生であり，大経の第20願による往生で，他力回向には出遇うことなく，自力の行としての念仏にとらわれており，「自力といふは，わが身をたのみ，わがこころをたのむ，わが力をはげみ，わがさまざまの善根をたのむひとなり」(『一念多念文意』)[註4] であり，「思い」からは離れ得てはいても，「議(はか)る」ことからは離れ得ず，自我のはからいにとらわれているがゆえに，その名を得ていると言われる。「思い議(はか)る」ことから離れ得ている「難思議」とは，一字違いであるが，他力と自力とでは，世界がまったく違っていると言わなければならない。

真実の報土(承前)

「剋念願生，亦得往生，即入正定聚」とある『浄土論』の言葉が，読み替えされている理由は，現生正定聚を明らかにするためであるが，「剋念してむまれむとねがふひと」[註5] とは，信を得てかの国に生まれんと願う願生者であり，「またすでに往生をえたるひと」というのは得生者であり，両者ともに「即入正定聚」であることが明らかにされている。これは，得生において正定聚であることよりも，願生のときにすでに正定聚であることを明らかに

することが主眼であるからである。宗祖がしばしば，第11願の「住正定聚 ── 必至滅度」，すなわち，「成等正覚 ── 証大涅槃」の次第を，因果の関係で述べておられるのは，如来回向との出遇いの場が正定聚であり，如来回向が正定聚として場を開くと言い得るのではなかろうか。この『浄土三経往生文類』の最初の書き出しの文に，宗祖は，次のように因果を明らかにされていた。

> 大経往生といふは，如来選択の本願，不可思議の願海，これを他力とまふすなり。これすなわち念仏往生の願因(左訓　たねといふ)によりて，必至滅度の願果をうるなり。現生(略本のみに左訓　このよをいふ)に正定聚のくらゐに住して，かならず真実報土にいたる。これは阿弥陀如来の往相回向の真因(左訓　まことのいんなり)なるがゆへに，無上涅槃のさとりをひらく，これを『大経』の宗致(広本のみに左訓　むねとすとなり)とす。このゆへに大経往生とまふす，また難思議往生とまふすなり。[註6]

「現生に正定聚のくらゐに住」することが因となって，「かならず真実報土にいたる」という果があるのであり，「無上涅槃のさとりをひらく」という果があるのである。

同様のことが，「涅槃の分を得」とある上記4番目の清浄功徳の引文においても言い得ると思われる。「涅槃の分を得」ということは，『成唯識論』の帰敬序に，「満に分に」とあるが，その「満」とは仏であり，「分」とは菩薩であると教えられるが，その表現と完全に重なるかどうかは定かではないが，涅槃に「分」があるという表現からは，円満完全には達してはいないが，前段階の部分には達しているという意味が考えられる。それが正定聚である。『大経』第11願における「住定聚 ── 必死滅度」，すなわち『如来会』の「成等正覚 ── 証大涅槃」という表現においてもまた，「涅槃の分を得」と同じ意味が「住定聚」「成等正覚」の位に与えられているものと考えることができる。

宗祖の消息集の中には，門弟から門弟へあてた消息も在中し，そこには「分」の意味が，上記とは違って，分限・分際の意味で使われているのが見られる。

> また弥勒とひとしと候ふは，弥勒は等覚の分なり，これは因位の分なり。これは十四・十五の月の円満したまふが，すでに八日・九日の月のいまだ円満したまはぬほどを申し候也。これは自力修行のやうなり。われらは信心決定の凡夫くらゐ正定聚のくらゐなり。これは因位なり，これ等覚の分なり。かれは自力也，これは他力なり。自他のかはりこそ候へども，因位のくらゐはひとしといふなり。また弥勒の妙覚のさとりはおそく，われらが滅度にいたることはとく候はんずるなり。かれは五十六億七千万歳のあかつきを期し，これはちくまくをへだつるほどなり。かれは漸頓のなかの頓，これは頓のなかの頓なり。滅度といふは妙覚なり。曇鸞の『註』にいはく，樹あり，好堅樹といふ。この木，地の底に百年わだかまりゐて，おふるとき一日に百丈生ひ候ふなるぞ。この木，地の底に百年候ふは，われらが娑婆世界に候ひて，正定聚の位に住する分なり。一日に百丈生ひ候ふなるは，滅度にいたる分なり。これにたとへて候也。これは他力のやうなり。松の生長するはとしごとに寸をすぎず，これはおそし，自力修行のやうなり。また如来とひとしといふは，煩悩成就の凡夫，仏の心光にてらされまいらせて信心歓喜す。信心歓喜するゆへに正定聚のかずに住す。[註7]

「涅槃の分」，あるいは，円満なるもの分というときには，究極には達してはいないが，前段階の部分には達しているという意味が考えられるが，今ここにあるような「等覚の分」という表現は，等覚は妙覚の前段階であるから，分限・分際の意味で使われている「分」である。月齢14・15という，満月の1日前と満月そのものと，月齢8・9という，上弦を過ぎた頃の月との対比を喩えにしているのが，分かり易い喩えであるが，めずらしいものである。「五十六億七千万歳」が「漸頓のなかの頓」であり，「ちくまく(竹膜)」とは，竹の節ごとにある膜であろうが，「これは頓のなかの頓なり」と言われている。「紙一重」に近い表現である。次に現れる「好堅樹」の喩えもめずらしいものである。この消息は，宗祖のものではなく，門弟から門弟への消息であるが，おそらく宗祖との語らいの中にも，しばしば語られた喩えではなかろうかと推測される。

煩悩成就の凡夫人が，かの浄土に生を得ることは，これひとえに如来回向によるものであり，それは，正定聚として場が開かれていたのである。

信心獲得の因果

信心獲得ということについて，因位と果位を区別する宗祖の言葉にしばしば出合うことがあるが，これはどういうことを言おうとされているのであろうか。やはり，背景には，第11願の必至滅度の願があり，正定聚から滅度への道が，因果として語られ，そのことは，如来の往還二回向の成就を意味するものではないであろうか。

「自然法爾抄」には，「獲得」と「名号」の語義を，因位と果位に分けて考察されているのが見られる。その後で，「自然法爾」の語義を解釈されているが，その間の関係は，どのように考えられるのであろうか。

> 獲の字は，因位のときうるを獲といふ。得の字は，果位のときにいたりてうることを得といふなり。名の字は，因位のときのなを名といふ。号の字は，果位のときのなを号といふ。自然といふは，自は，おのずからといふ。行者のはからいにあらず，しからしむといふことばなり。然といふは，しからしむといふことば，行者のはからいにあらず，如来のちかいにてあるがゆへに。法爾といふは，如来の御ちかいなるがゆえに。しからしむるを法爾という。この法爾は，御ちかいなりけるゆへに，すべて行者のはからいなきをもちて，このゆへに，他力には義なきを義とすとしるべきなり。自然といふは，もとよりしからしむといふことばなり。弥陀仏の御ちかいの，もとより行者のはからひにあらずして，南無阿弥陀仏とたのませたまひて，むかえんとはからわせたまひたるによりて，行者のよからんともあしからんともおもわぬを，自然とはもうすぞとききてそうろう。ちかいのようは，無上仏にならしめんとちかいたまへるなり。無上仏とまふすは，かたちもなくまします。かたちもましまさぬゆえに，自然とはもうすなり。かたちましますとしめすときは，無上涅槃とはもうさず。かたちもましまさぬようをしらせんとて，はじめに弥陀仏とぞききならひてそうろう。弥陀仏は，自然のようをしらせんりょうなり。この道理をこころえつるのちには，この自然のことは，つねにさたすべきにはあらざるなり。つねに自然をさたせば，義なきを義とすといふことは，なお義のあるべし。これは仏智の不思議にてあるなり。[註8]

「自然法爾抄」における非常に透徹した言語表現にあるように，「自」も「然」も「法爾」もみな，「しからしむ」という意味であることが述べられている。「自然法爾抄」の中の言葉では，「無上涅槃」と言われているが，かの「無上涅槃」から，「行者のはからい」のこの世界へ，「しからしむ」はたらきがはたらきつづけている。他力回向・本願力回向である。そのはたらきは，「無上仏にならしめん」という「ちかい」である。そして，「無上仏ともうすは，かたちもなくまします。かたちもましまさぬゆえに，自然とはもうすなり」ということは，行者が，「よからん」「あしからん」ととらわれ続けている善悪・比較・優劣の価値観の自力世界から，解放された世界があり，解放されていく道がここにあるということを示している。そして，それは，行者が望んだのではなく，如来の「はからい」であることを示して，「弥陀仏の御ちかいの，もとより行者のはからいにあらずして，南無阿弥陀仏とたのませたまいて，むかえんとはからわせたまいたるによりて」と言われているのである。そのことにふれていく。

このことから考えると，「獲の字は，因位のときうるを獲という。得の字は，果位のときにいたりてうることを得というなり」ということは，因位は如来回向に出遇って自己が仏法にとらえられた場が因位であり，如来回向としての正定聚であり，「正定聚の数に入る」，南無阿弥陀仏のサンガをいただくことであり，獲信は願生心の誕生であり，それは必ず果位の得生に至る。信心獲得は，自己が信心を獲得するのではなく，信心が自己として獲得されるのであって，「獲」も「得」も，ひとえに如来回向による。願力自然である。

次に，「名の字は，因位のときのなを名という。号の字は，果位のときのなを号という」とある名号成就は，如来が自己を名号として成就する相をいう。自己において名号が成就することは，如来回向による。南無阿弥陀仏の名告りが，自己へ回向されて来ているという事実。なぜ名告らなければならなかったのか。その理由は，「南無阿弥陀仏とたのませたまいて」とあるように，如来が自己自身を名号として成就せんとされたからである。如来の名号の名告りは，名号が如来自身として成就する歩みである。それは，衆生の存在の上に，本願力回向が成就する歩みである。人間は，自分が歩まずに，如来を歩ましているのである。人間は，自分で歩んだら，必ずそのことにとらわれる自力的存在であることを見とおして，如来は，「如是凡夫」と言われた。凡夫は凡夫であれ，という教言において，凡夫救済の真実の法を，他力回向として，真実を，凡夫に開示しようとされていたのである。

衆生の信心獲得について，因位と果位があるのは，如来の他力回向の第11願のゆえである。自力行においては，信心獲得ではなく発菩提心，発心であろうし，因位は初発心位であり，果位は仏果の位とされるであろう。しかし，如来の他力回向によっては，因位は正定聚，あるいは等正覚，果位は滅度，あるいは大涅槃であるとされる。宗祖は，如来回向の本願力との出遇いの場における信心獲得を，まず現生正定聚において獲ることであるから「獲」の因位とし，その場において，「よきひと」との出遇い，南無阿弥陀仏のサンガの一員としての師友との出遇いを，「見敬」ということばによって表現しており，それは果位において，つまり，現生正定聚 ── 必至滅度において，得らるべき仏果が「得」の果位のおける相として語られている。「獲得」は衆生の信心獲得の因果であるが，「名号」は，如来の本願成就の因果であり，因位のときの名告りの名は，果位のときには，如来が自己を名号として成就

するまでの歩みとなるのであり，如来の本願が，衆生のうえに，自己を名号として成就しようとする相を表わしていると言われている。衆生の信心獲得の因果と如来の本願成就の因果とは，衆生を救済することが，如来が如来自身の救済となることを表わしており，それがまさしく如来の往還二回向なのであり，自利利他を明かす意味で，凡夫と如来が共に救われる一事を表わしている。

宗祖は，『愚禿鈔』で，次のように述べておられる。

> 本願を信受するは，前念命終なり。「すなわち正定聚の数に入る」(文)「即の時必定に入る」(文)「また必定の菩薩と名づくるなり」(文)
>
> 即得往生は，後念即生なり。他力金剛心なり，知るべし。便ち弥勒菩薩に同じ。自力金剛心なり，知るべし。大経には，「次如弥勒」と言えり。(文)[註9]

ここにおける「前念命終」と「後念即生」との関係は，前念と後念と言われているように，本願の第11願に対応しており，「住正定聚」と「必至滅度」との関係である。なぜ「後念即生」が「他力金剛心」であり，「すなわち弥勒菩薩に同じ」であるのかというと，そのことは，『如来会』の第11願の言葉である「成等正覚」と「証大涅槃」に対応しているからである。「等正覚」は「正覚」であり，これは「妙覚」の一段階前の弥勒菩薩の位であるからである。「次如弥勒」なのである。凡夫であることの自覚は，「次如弥勒」「便同弥勒」の世界を開く。『愚禿鈔』にみえるこの言葉は，「前念命終，後念即生」という願生者誕生という自己が変革されるできごとが，信の一念において起こることを，余す所なく極めて明瞭な言葉で示されている。

如来回向としての獲信

『教行信証』「信巻」において，宗祖は，信心獲得の因果を，ひとえに如来回向によることを明かされて，

> それ以みれば，信楽を獲得することは，如来選択の願心より発起す[註10]

と「信巻」の別序に言われ，人間の願いが先にあったのではなく，まず如来の本願が先にあったことを明かされている。信心の獲得は，如来の本願力回向によるのであるから，「獲」とは因のときうること，「得」とは果においてうること，と述べられるのは，まったく，「住正定聚 ── 必至滅度」の次第を因果の関係において述べたものに他ならないのではなかろうか。正定聚は，滅度が必至した場であると言われているように，人間の自力とは関わらない。人間の自力が関わるのは，邪定聚・不定聚であるとして非常に厳密に区別され，その間にはいかなる混乱もありえない。

『教行信証』の「正信念仏偈」には，「獲信見敬大慶喜」という言葉があるが，『教行信証』の坂東本には，ここに，宗祖による校正のあとが見られ，「見敬得大慶喜人(見て敬ひ得て大きに慶喜する人は)」を抹消して，「獲信見敬大慶人」と書き換えられている。また，『尊号真像銘文』には，「獲信見敬得大慶」とあり，ご自釈には，

> 「獲信見敬得大慶」といふは，この信心をえておほきによろこびうやまふ人といふ也。大慶はおほきにうべきことをえてのちによろこぶといふ也。[註11]

とある。宗祖が，七文字に収め切れずに言葉を非常に厳密に選ばれていたことを伺い知ることができる。獲信の場にこそ，住正定聚が起こり，正定聚の数に入るという，南無阿弥陀仏のサンガをいただく身とさせてもらい，得果においては，「大慶喜」「大慶人」「得大慶」，つまり，坂東本で訂正されなければならなかった「得大慶喜人」という字数の制約を離れた言葉が示すように，如来から「則我善親友」と喜ばれる存在となる。

「総序」の文においては，「獲」は信心獲得の「獲」であり，「得」は「得大慶」の「得」であることが，非常に厳密に漢字が当てられているのを見ることができる。

> ああ，弘誓の強縁，多生にも値いがたく，真実の浄信，億劫にも獲がたし。たまたま行信を獲ば，遠く宿縁を慶べ。……ここに愚禿釈の親鸞，慶ばしいかな，西蕃月支の聖典，東夏日域の師釈に，遇ひがたくしていま遇ふことを得たり，聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して，ことに如来の恩徳の深きことを知んぬ。ここをもつて聞くところを慶び，獲るところを嘆ずるなりと。[註12]

「獲信見敬大慶喜」について，「獲信して」，「見て敬い」，何を見るのかというと，仏・菩薩であり，つまりそれは，「よきひと」との出遇いのことであり，それが因となって，果としての「大慶喜」を得ることとなる。「獲信」も「得大慶喜」もともに，如来回向によってある。『大経』には，次のように語られている。

> 法を聞きて能く忘れず，見て敬い得て大きに慶べば，すなわち我が善き親友なり。このゆえに当に意を発

すべし。たとい世界に満てらん火をも，必ず過ぎて要めて法を聞かば，会ず当に仏道を成ずべし，広く生死の流れを度せん。[註13]

それ，かの仏の名号を聞くことを得て，歓喜踊躍して乃至一念することあらん。当に知るべし，この人は大利を得とす。そなわちこれ無上の功徳を具足するなり。このゆえに弥勒，たとい大火ありて三千大千世界に充満せんに，要ずまさにこれを過ぎてこの経法を聞きて，歓喜信楽し，受持読誦し，説のごとく修行すべし。[註14]

正定聚は，「獲信見敬」の場であり，滅度は「得大慶」「大慶喜」であることが言われている。

「慶楽」とは，「慶」の言は印可の言なり，獲得の言なり，「楽」の言は悦喜の言なり，歓喜踊躍なり。[註15]

と『愚禿鈔』にある。「印可」とは，「もし仏意に称えば即ち印可して如是如是と言まう」[註16] とあるように，「慶」は仏意の如是をあらわす。「印可の言なり，獲得の言なり」と言われることは，仏意の如是如是であり，如来回向との出遇いの因果が言われている。

歓喜といふは，歓はみをよろこばしむるなり，喜はこころによろこばしむるなり，うべきことをえてむずと，かねてさきよりよろこぶこころなり。(『一念多念文意』)[註17]

「歓喜踊躍乃至一念」といふは，「歓喜」は，うべきことをえてむずと，さきだちて，かねてよろこぶこころなり。「踊」は天におどるといふ，「躍」は地におどるといふ，よろこぶこころのきわまりなきかたちなり。慶楽するありさまをあらわすなり。慶は，うべきことをえて，のちによろこぶこころなり。楽は，たのしむこころなり。これは，正定聚のくらいをうるかたちをあらわすなり。(『一念多念文意』)[註18]

「一念喜愛心」は一念慶喜の真実信心よくひらけ，かならず本願の実報土にむまるとしるべし。慶喜といふは，信をえてのちよろこぶこころをいふ也。(『尊号真像銘文』)[註19]

この信心をうるを慶喜といふなり。慶喜するひとは，諸仏とひとしきひととなづく。慶はよろこぶといふ，信心をえてのちによろこぶなり。喜はこころのうちによろこぶこころたえずしてつねなるをいふ，うべきことをえてのちに，みにみもこころにもよろこぶこころなり。信心をえたるひとをば，「分陀利華」とのたまへり。(『唯信鈔文意』)[註20]

他力の信心うるひとを　うやまひおほきによろこべば　すなはちわが親友ぞと　教主世尊はほめたまふ(『正像末和讃』)[註21]

信心をうるをよろこぶ人をば，経には，諸仏とひとしきひとと，ときたまへり。(『一念多念文意』)[註22]

これは経の文なり。『華厳経』にのたまはく，「信心歓喜者　与諸如来等」といふは，信心よろこぶひとはもろもろの如来とひとしといふなり。もろもろの如来とひとしといふは，信心をえてことによろこぶひとを，釈尊のみことには「見敬得大慶　即我善親友」ととときたまへり。また弥陀の第十七の願には「十方世界　無量諸仏　不悉咨嗟　称我名者　不取正覚」とちかひたまへり。願成就の文には，よろずの仏にほめられよろこびたまふとみえたり。すこしもうたがうべきにあらず。これは如来とひとしといふ文どもをあらはししるすなり。[註23]

諸仏称名の願とまふし，諸仏咨嗟の願とまふしさふらふなるは，十方衆生をすすめんためときこへたり。また十方衆生の疑心をとどめん料ときこえてさふらふ。『弥陀経』の十方諸仏の証誠のやうにてきこへたり。詮ずるところは，方便の御誓願と信じまひらせさふらふべし。念仏往生の願は，如来の往相回向の正業正因なりとみへてさふらふ。まことの信心あるひとは等正覚の弥勒とひとしければ，如来とひとしとも諸仏のほめさせたまひたりとこそきこへてさふらへ。[註24]

しかれば，この信心のひとを釈迦如来は，「わがしたしきともなり」(大経)と，よろこびまします。この信心の人を「真の仏弟子」といえり。[註25]

「住正定聚から必至滅度へ」の展開は，「成等正覚から証大涅槃へ」と対応して，「獲信見敬から大慶喜へ」の展開となり，「おおきにうべきことをえてのちによろこぶ」という因と果の関係は，当然のことながら，衆生の往相が，如来回向によることを明かしている。そのことは，逆に如来の還相回向が，それに先立って，あるいは同時に，「必至滅度から住正定聚へ」として起こっていることが明らかである。

願生ということが，獲信ということであり，得生ということは，得大慶ということである。なぜ「のちに」と言って，前後を区別するのかについては，願生においてすでに，如来回向に出遇っていることを証し，往還二回向によって，住正定聚，すなわち，成等正覚が起こっているのであって，第11願によって，必至する滅度，証大涅槃

が証されている。

如来回向によって，「住正定聚から必至滅度へ」，すなわち，「成等正覚から証大涅槃へ」という衆生の往相があることを，宗祖の最後の著作となった『正像末和讃』には，非常に詳細にうたわれている。

度衆生心といふことは　弥陀智願の回向なり　回向の信楽うるひとは　大般涅槃をさとるなり(20)
如来の回向に帰入して　願作仏心をうるひとは　自力の回向をすてはてて　利益有情はきわもなし(21)
弥陀の智願海水に　他力の信水いりぬれば　真実報土のならいにて　煩悩菩提一味なり(22)
如来二種の回向を　ふかく信ずるひとはみな　等正覚にいたるゆへ　憶念の心はたえぬなり(23)
弥陀智願の回向の　信楽まことにうるひとは　摂取不捨の利益ゆへ　等正覚にいたるなり(24)
五十六億七千万　弥勒菩薩はとしをへん　まことの信心うるひとは　このたびさとりをひらくべし(25)
念仏往生の願により　等正覚にいたるひと　すなわち弥勒におなじくて　大般涅槃をさとるべし(26)
真実信心うるゆへに　すなはち定聚にいりぬれば　補処の弥勒におなじくて　無上覚をさとるなり(27)[註26]

『尊号真像銘文』にも，宗祖ご自身の「正信念仏偈」の肝要部分をご自釈されている。

「成等覚証大涅槃」といふは,「成等覚」といふは正定聚のくらゐなり。このくらゐを龍樹菩薩は「即時入必定」とのたまへり。曇鸞和尚は「入正定之数」とおしへたまへり。これはすなはち弥勒のくらゐとひとしと也。「証大涅槃」とまふすは，必至滅度の願成就のゆへにかならず大般涅槃をさとるとしるべし。「滅度」とまふすは，大涅槃也。[註27]

『大経』には住正定聚 ── 必至滅度とあるのを，『如来会』における成等正覚 ── 証大涅槃の深々な意味として捉え直されたことは，『如来会』の第 11 願によって，『大経』第 11 願の真意を，宗祖は了解されたのである。「弥勒にひとし」ということは，『大経』の住正定聚 ── 必至滅度からは出てこないのであって，『如来会』の成等正覚 ── 証大涅槃によってこそ，しかも，更にそこには，等覚 ── 妙覚をも重ねる必要があるのであるが，明らかにされることである。先にも示したが，『一念多念文意』において，宗祖は次のように述べられている。

「次如弥勒」とまふすは，「次」はちかしといふ，つぎにといふ。ちかしといふは，「弥勒」は大涅槃にいたりたまふべきひとなり，このゆへに，弥勒のごとしとのたまへり。念仏信心の人も，大涅槃にちかづくとなり。つぎにといふは，釈迦仏のつぎに，五十六億七千万歳をへて，妙覚(左訓　まことのほとけなり)のくらゐにいたりたまふべしとなり。「如」はごとしといふ。ごとしといふは，他力信楽のひとは，このよのうちにて不退のくらゐにのぼりて，かならず大般涅槃のさとりをひらかむこと，弥勒のごとしとなり。[註28]

このことは，『教行信証』「証巻」において明らかである。上記の『正像末和讃』や『尊号真像銘文』の「正信念仏偈」からの引文のご自釈も，あるいは，先に前稿に示したように，関東の門弟への消息類においても，繰り返し繰り返し，このことを伝えようとされている。

還相回向

二つに還相の回向といふは，『浄土論』にいはく，「本願力の回向をもつてのゆゑに，これを出第五門と名づく」といへり。これは還相の回向なり。一生補処の悲願にあらはれたり。大慈大悲の願，『大経』にのたまはく，「たとひわれ仏を得たらんに，他方仏土のもろもろの菩薩衆，わが国に来生すれば，究竟してかならず一生補処に至る。その本願の自在の所化，衆生のためのゆゑに，弘誓の鎧を被て，徳本を積累し，一切を度脱し，諸仏の国に遊びて，菩薩の行を修し，十方の諸仏如来を供養し，恒沙無量の衆生を開化して無上正真の道を立せしめんをば除かんと。常倫に超出し，諸地の行現前し，普賢の徳を修習せん。もししからずは，正覚を取らじ」と。{文　}　この悲願は，如来の還相回向の御ちかひなり。

如来の二種の回向によりて，真実の信楽をうる人は，かならず正定聚の位に住するがゆゑに他力と申すなり。しかれば，『無量寿経優婆提舎願生偈』にいはく，「いかんが回向したまへる。一切苦悩の衆生を捨てずして，心につねに作願すらく，回向を首として大悲心を成就することを得たまへるがゆゑに」とのたまへり。これは『大無量寿経』の宗致としたまへり。これを難思議往生と申すなり。

『教行信証』において，「証巻」は殆ど『浄土論』『浄土論註』からの引用で構成されているが，この『浄土三経往生文

類』においても，証の前半はもちろん，第11願とその成就文であるが，証の後半の還相回向の段に入ると，やはり，『教行信証』と同様に，『浄土論』『浄土論註』に依っている。しかも，『教行信証』では，「『註論』に顕れたり。かるがゆえに願文を出ださず。『論の註』を披くべし」と宗祖が，願文を出されず，「披くべし」と言われた，その『論の註』によって，第22願の願文を，上記のごとく，提示しておられる。

大経の難思議往生を終えるに際し，宗祖は，「しかれば，『無量寿経優婆提舎願生偈』にいはく」として，天親菩薩の言葉を引いておられる。

いかんが回向したまへる。一切苦悩の衆生を捨てずして，心につねに作願すらく，回向を首として，苦悩の衆生を捨てずして，大悲心を成就することをえたまえるがゆえにとのたまへり。[註29]

これは，同意趣が，和讃にうたわれている。

如来の作願をたづぬれば　苦悩の衆生を捨てずして　回向を首としたまひて　大悲心をば成就せり[註30]

苦悩の有情の救いは，回向による救済しかありえないという洞察は，穢土と浄土，凡夫と如来，煩悩と菩提という二世界を峻別して，その間の混乱は決してありえないことを表わす思想である。自己肯定の延長上に浄土を求めることが，どれほど如来の大悲心を拒否することであることか。人間の世間心をもって，その間を混乱させない。最も純粋な意味で，真実の自己展開という回向によって，真実そのものと苦悩の有情，すなわち無漏と有漏との，出遇うはずのない出遇いを起こそうとする未曾有の法がここに示される。如来回向によらなければ救済が不可能な凡夫に対し，一人も見捨てない無縁の大悲の心は，回向として成就した。「しひ(慈悲)のはしめ(始)としかしら(頭)としてたいし(大慈)たいひ(大悲)しむ(心)をえ(得)たまへるなりとし(知)るへし」との左訓がある。如来回向こそ，大慈大悲心として成就した最も究極的な慈悲の相である。

還相回向については，宗祖の仮名聖教には，どのように説かれているであろうか。和讃には，還相回向の二種の分類が可能であると言われている。それは，「衆生の生の相」と「教・行・信・証」とであるとして言われている。しかしながら，ここでは，還相回向だけで言うならば，「自己を含めた一切衆生の還相」と「還相の菩薩を含めた他力回向の教相」との二種に分類されると思われる。以下に，仮名聖教を見ていきたい。まず，『歎異抄』における宗祖の言葉においては，どのようであろうか。

(第4章)浄土の慈悲といふは，念仏していそぎ仏になりて，大慈大悲心をもて，おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生に，いかにいとをし不便とおもふとも，存知のごとくたすけがたければ，この慈悲始終なし。しかれば，念仏まふすのみぞ，すえとをりたる大慈悲心にてさふらうべきと云々。

(第5章)親鸞は父母の孝養のためとて，一返にても念仏まふしたること，いまださふらはず。そのゆへは，一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり，いづれもいづれもこの順次生に仏になりてたすけさふらうべきなり。わがちからにてはげむ善にてもさふらはばこそ，念仏を回向して，父母をもたすけさふらはめ。ただ自力をすてて，いそぎ浄土のさとりをひらきなば，六道四生のあひだ，いずれの業苦にしずめりとも，神通方便をもて，まず有縁を度すべきなりと云々。

『歎異抄』においては，「自己を含めた一切衆生の還相」と「還相の菩薩を含めた他力回向の教相」との両方に，還相回向表現が見うけられ，上に挙げた言葉が，前者「自己を含めた一切衆生の還相」に相当する。後者「還相の菩薩を含めた他力回向の教相」については，次の言葉が挙げられる。

(第2章)親鸞におきては，ただ念仏して，弥陀にたすけれられまひらすべしと，よきひとのおほせをかふりて信ずるほかに，別の子細なきなり。

(第6章)如来よりたまはりたる信心をわがものがほにとりかへさんとまふすにや。かへすがへすも，あるべからざることなり。自然のことはりにあひかなはば，仏恩をもしり，また師の恩をもしるべきなりと云々。

(第9章)いそぎまひりたきこころなきものを，ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ，いよいよ大悲大願はたのもしく，往生は決定と存じさふらへ。

(後序)源空が信心も，如来よりたまはりたる信心なり。善信房の信心も如来よりたまはらせたまひたる信心なり。されば，ただひとつなり。別の信心にておはしまさんひとは，源空がまひらんずる浄土へは，よもまひらせたまひそうらはじ。

そして，非常に興味深い表現が見受けられる一文がある。

(第2章)弥陀の本願まことにおはしまさば，釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば，善導の御釈虚言したまふべからず。善導の御釈まことならば，法然の仰せそらごとならんや。法然のおほせ

まことならば，親鸞がまふすむね，またもてむなしかるべからずさふらふか。詮ずるところ，愚身の信心におきてはかくのごとし。[註31]

この言葉は，「自己を含めた一切衆生の還相」と「還相の菩薩を含めた他力回向の教相」との両方において，含まれるとも，含まれないとも，どちらとも判断できない表現である。弥陀と釈尊との二尊の教勅，釈尊―善導―法然―親鸞という師「よきひと」との出遇いの系譜，ここまでは「還相の菩薩を含めた他力回向の教相」であるが，「親鸞が申すむね，またもつてむなしかるべからず候ふか」という言葉は，衆生利益であり，「自己を含めた一切衆生の還相」に含まれるべき表現である。

如来の往還二回向論について，特に，還相回向に関する見解は，かなり種々の解釈が分かれているけれども，自己の還相は黙して語らずとする解釈，現在世における積極的な社会教化事業とする解釈，死後の未来世において還来穢国しての救済事業とする解釈など，いづれも「自己を含めた一切衆生の還相」に，一応含めることができる。「還相の菩薩を含めた他力回向の教相」に含まれる解釈は，還相の主体は衆生ではなくて，法蔵菩薩であるとし，往還ともに法蔵菩薩が衆生の願生心となり，往生浄土を歩むとする解釈，還相回向とは真実の教行信証四法であるとする解釈，如来の利益衆生の大悲心に対する知恩報徳として，往生浄土の往相回向の道を歩ましめられるとする解釈などもあるが，ここでは，還相の菩薩との出遇いは，師としての「よきひと」との出遇いであり，往生浄土の道において出遇うのは，願いを同じくする朋であるとする解釈を立場とししして考察したい。

『教行信証』「証巻」の還相回向の記述においては，五念門の行を行ずる菩薩は法蔵菩薩を意味しており，『浄土論註』の解釈からは，後者「還相の菩薩を含めた他力回向の教相」のみであると思われる。しかしながら，宗祖は，『教行信証』の末尾において，『安楽集』の言葉を引いて，次のように言われる。

『安楽集』に云わく，真言を採り集めて，往益を助修せしむ。何となれば，前に生まれむ者［モノ］は後を導き，後に生まれん者［ヒト］は前を訪え，連続無窮にして，願わくは休止せざらしめむと欲す。無辺の生死海を尽くさむがためのゆえなり，と。[註32]

このように『安楽集』には述べられている。これは，「自己を含めた衆生の還相」を表わしていて，還相回向が連続無窮にして止むことがない相を願いとしているのが，如来の大悲である。利他教化地，出第五門，五念門の回向門としての菩薩行を，自己を含めた一切衆生が自己の課題とする。宗祖は，『教行信証』を書き終えるにあたり，道綽が『安楽集』を書いたと同様の願いをもって，一切衆生の往生浄土の道を究竟することを願いとして，一切の往生人に手渡そうとされてこの普遍の書を書き著されたと考えられる。『歎異抄』の「一切の有情は，みなもって世々生々の父母兄弟なり。いづれもいづれも，順次生に仏になりてたすけさふらうべきなり」という言葉は，『安楽集』のこの言葉と，『浄土論註』「解義分」の「眷属功徳成就」にある「同一に念仏して別の道なきが故に。遠く通ずるに夫れ四海の内，皆兄弟なり。眷属無量なり。焉んぞ思議すべきや。」という言葉とにもとづく。そして，『歎異抄』の第2章の「法然の仰せまことならば，親鸞が申すむね，またもつてむなしかるべからず候ふか」という言葉もまた，『安楽集』のこの言葉にもとづいている。「真言を採り集めて，往益を助修せしむ」ことは，一切衆生の往生浄土の歩みをうながす如来の往相回向なのであり，道綽が『安楽集』を，「前に生まれむ者は後を導き，後に生まれむ者は前を訪え，連続無窮にして，願わくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽くさむがためのゆえなり」との願いをもって書き記されたことは，真の仏弟子としての真実の課題であり，如来の還相回向として，宗祖は道綽の言葉に出遇われたのであり，その同じ願いを，宗祖が，今度は，一切の願生者に，『教行信証』を如来の還相回向として手渡そうとされたのであり，『歎異抄』では，唯円に，「親鸞が申すむね」を，「順次生に仏になりてたすけそうろうべき」という如来の還相回向として語られたものと考えられる。

これを，真如実相を証すとももうす。無為法身とも言う。滅度にいたるともいう。法性の常楽を証すともうすなり。このさとりをうれば，すなわち大慈大悲きわまりて，生死海へあえりいりて，普賢の徳に帰せしむとまふす。この利益におもむくを，来という。(『唯信鈔文意』)[註33]

関東の門弟にあてた消息においても，「自己を含めた一切衆生の還相」としての還相回向が語られているのを見る。

悪をこのむひとにもちかずき，善をせぬひとにもちかづきなんどすることは，浄土にまいりてのち，衆生利益にかえりてこそ，さようの罪人にもしたしみちかづくことはそうらえ。それも，わがはからいにはあらず。弥陀のちかいにより，かの御たすけによりてこそ，おもうさまのふるまいもそうらわんずれ。[註34]

和讃には，特に宗祖最晩年の著作『正像末和讃』においては，往還二回向をうたわれたものがかなりあるが，そ

こには，「自己を含めた一切衆生の還相」と「還相の菩薩を含めた他力回向の教相」との還相回向の二種の分類がどのように表れているのであろうか。

如来二種の回向を　ふかく信ずるひとはみな　等正覚にいたるゆえ　憶念の心はたえぬなり(23)

弥陀智願の回向の　信楽まことにうるひとは　摂取不捨の利益ゆえ　等正覚にいたるなり(24)

如来の作願をたずぬれば　苦悩の有情をすてずして　回向を首としたまひて　大悲心をば成就せり(37)

真実信心の称名は　弥陀回向の法なれば　不回向となづけてぞ　自力の称念きらわるる(38)

弥陀智願の広海に　凡夫善悪の心水も　帰入しぬればすなわちに　大悲心とぞ転ずなる(39)

往相還相の回向に　まうあはぬ身となりにせば　流転輪廻もきはもなし　苦海の沈淪いかがせん(45)

無始流転の苦をすてて　無上涅槃を期すること　如来二種の回向の　恩徳まことに謝しがたし(48)

報土の信者はおおからず　化土の行者はかずおおし　自力の菩提かなはねば　久遠劫より流転せり(49)

南無阿弥陀仏の回向の　恩徳広大不思議にて　往相回向の利益には　還相回向に回入せり(50)

往相回向の大慈より　還相回向の大悲をう　如来の回向なかりせば　浄土の菩提はいかがせん(51)[註35]

弥陀の回向成就して　往相還相ふたつなり　これらの回向によりてこそ　心行ともにえしむなれ(14)

往相の回向ととくことは　弥陀の方便ときいたり　悲願の信行えしむれば　生死すなはち涅槃なり(15)

還相の回向ととくことは　利他教化の果をえしめ　すなはち諸有に回入して　普賢の徳を修するなり(16)[註36]

右の最後の3首は，『高僧和讃』からであるが，その(16)と，『正像末和讃』から挙げた(50)は，還相して利益衆生する主体は衆生である。「自己を含めた一切衆生の還相」を表わしている。ほかは，「還相の菩薩を含めた他力回向の教相」に配されるが，「自己を含めた一切衆生の還相」に配されるものが少ないがあることは事実である。「聖徳奉讃」にも往還二回向がうたわれている。以下において，我々衆生の往相への関わりが(4)と(11)の和讃であるが，(5)の和讃は，我々衆生が「如来二種の回向を　十方にひとしくひろむべし」とされ，「他力の信をえんひと」，つまり，そのような衆生の課題が，還相の利益衆生であることが示されている。

聖徳皇のあわれみて　仏智不思議の誓願に　すすめいれしめたまひてぞ　住正定聚の身となれる(4)

他力の信をえんひとは　仏恩報ぜんためにとて　如来二種の回向を　十方にひとしくひろむべし(5)

聖徳皇のおあわれみに　護持養育たへずして　如来二種の回向に　すすめいれしめおはします(11)[註37]

そもそも，衆生の往相については，教えの大部分が「いかに救済が可能か」についてであることは当然であるが，『教行信証』においても，難思議往生を明かす教行信証のうち，分量だけで言うならば，往相回向の分量と還相回向の分量は均等ではないが，還相における利益衆生の「教」は，まさしく難思議往生を明かす「教行信証」にほかならないと思われる。「如来二種の回向を　十方にひとしくひろむべし」と言われるのは，そういう意味である。ほかにも，和讃においては，還相回向を表現する和讃のうち，「自己を含めた一切衆生の還相」は，数は少ないが，次のようである。

安楽浄土にいたるひと　五濁悪世にかへりては　釈迦牟尼仏のごとくにて　利益衆生はきはもなし(18)[註38]

願土にいたればすみやかに　無上涅槃を証してぞ　すなわち大悲をおこすなり　これを回向となづけたり(10)[註39]

「自然法爾抄」にも，如来の往還二回向が，非常に簡潔に述べられていることは，先に見たとおりである。

獲の字は，因位のときうるを獲といふ。得の字は，果位のときにいたりてうることを得といふなり。名の字は，因位のときのなを名といふ。号の字は，果位のときのなを号といふ。[註40]

衆生の信心獲得ということと，如来の名号成就ということとは同一の事実である。衆生の往相回向としての教行信証は，如来の還相回向の名号成就のことである。「順次生に仏になりて，たすけそうろうべきなり」という真の仏弟子の願いは，はるかに雄大な願いであって，如来の往還二回向を一切衆生に届けたいという，「無辺の生死海を度せんがため」の大乗菩薩道の歩みとなっていく。宗祖の往還二回向論によって，如来の他力回向に出遇い得た者は，知恩報徳の道をたまわると言われている。還相回向によって知恩した者は，報徳としての往相回向の道の歩みをたまわるのである。

このたびは，「浄土三経往生文類の研究(続)」と題して，前稿の続きを書かせていただいたが，予定の字数が尽きようとしているので，残された「双樹林下往生」と「難思往生」については，別の機会にさせていただきたく思う。

註

註 1　『定本親鸞聖人全集』(以下『定親全』と略記)第三巻和文篇，28 頁，2008 年，法蔵館
註 2　『定親全』第二巻漢文篇，8 頁
註 3　『定親全』第一巻，309 頁
註 4　『定親全』第三巻和文篇，142 頁
註 5　『定親全』第三巻和文篇，131-132 頁
註 6　『定親全』第三巻和文篇，21 頁
註 7　『定親全』第三巻書簡編 17-19 頁
註 8　『定親全』第二巻和讃篇，220-223 頁，同第三巻書簡編 54-56 頁，同 72-74 頁
註 9　『定親全』第二巻漢文篇，13 頁
註 10　『定親全』第一巻，7 頁
註 11　『定親全』第三巻和文篇，119 頁
註 12　『定親全』第一巻，7 頁
註 13　『真宗聖教全書一　三経七祖部』，27 頁
註 14　『真宗聖教全書一　三経七祖部』，46 頁
註 15　『定親全』第二巻漢文篇，47 頁
註 16　『定親全』第二巻漢文篇，29 頁
註 17　『定親全』第三巻和文篇，126 頁
註 18　『定親全』第三巻和文篇，136-137 頁
註 19　『定親全』第三巻和文篇，118 頁
註 20　『定親全』第三巻和文篇，175 頁
註 21　『定親全』第二巻和讃篇，187 頁
註 22　『定親全』第三巻和文篇，135 頁
註 23　『定親全』第三巻書簡編，71 頁
註 24　『定親全』第三巻書簡編，155-157 頁
註 25　『定親全』第三巻書簡編，66 頁
註 26　『定親全』第二巻和讃篇，168-172 頁
註 27　『定親全』第三巻和文篇，116 頁
註 28　『定親全』第三巻和文篇，130-131 頁
註 29　『真宗聖教全書一　三経七祖部』，271 頁
註 30　『定親全』第二巻和讃篇，177 頁
註 31　『定親全』第四巻，5-35 頁
註 32　『定親全』第一巻，383 頁
註 33　『定親全』第三巻和文篇，160 頁
註 34　『定親全』第三巻書簡篇，119 頁
註 35　『定親全』第二巻和讃篇，170-184 頁
註 36　『定親全』第二巻和讃篇，93-94 頁
註 37　『定親全』第二巻和讃篇，203-207 頁
註 38　『定親全』第二巻和讃篇，16 頁
註 39　『定親全』第二巻和讃篇，85 頁
註 40　『定親全』第二巻和讃篇，220 頁